

内向き体質

南	善
無	財

菅原伸郎

東京のホテルで三月末、一週間にわたって国際宗教学宗教学史会議（I

AHR）の第十九回世界大会が開かれた。世界各国から宗教学者ら約千五百人が集まり、延べ三百五十以上の会場で討論を重ねた。欧米や極東だけでなく、アフリカやイスラーム圏などの宗教事情も垣間見ることができ、貴重な催しだった。

大会のテーマが「宗教——相克と平和」となったのは、宗教は平和の呼び水になるだけではない、という共通の認識があったからだ。9・11事件、イラク戦争、そしてオウム真理教事件などがあったためである

ことはいうまでもない。

あまりにも多くのシンポジウムがあったので、全体のことは分からない。ただ、私だけの印象では、伝統仏教からの参加が少ないように思われた。渡辺宝陽・立正大学元学長らのグループによる「法華仏教と和平の思想」といった分科会もあったが、日本仏教の地位から考えると、もっと多くてよかつたろう。ロビーなどでは、キリスト教徒の外国人学者と新宗教系の日本人研究者が目立っていた。

宗門の幹部からすれば、二時間程度の討論で何か分かるか、それよりも勤行に精を出せ、ということかも知れない。しかし、遠来の客人に宗学や教学の現状を聞いてもらおう、他流試合してみよう、という発想があつてもよかつたのではないか。

そんな思いもあつて、大谷大学を中心とした人たちが企画した分科会「『悪の自覚』と現代社会——親鸞思想を中心として」を聞いてみた。真宗学徒の発表に続いて、ポルトガル人の南山大学講師、ドミンゴス・スザ神父が「親鸞における悪の自覚と倫理実践」という題で次のような趣旨の発言をした。私には、まさに伝統仏教の内向き体質を批判しているように聞こえた。

「親鸞によれば、悪は人間存在の根本、煩惱そのものから必然的に起こる。倫理の実践も、信心によっておのずから生まれるのであり、必ずなすべきこととはされていない」

「キリスト教でも、罪は人間存在そのものによる。しかし、必然のものではなく、そこには人間の自由意志が介在してくる。同じように、愛の実践もおのずからではない。汝愛すべし、といった、義務的な性格を持つている」

「阿弥陀仏の本願力に一切を委ねる他力の姿勢からは、現実を変革する衝動が生まれにくい気がする。現実に対する仏教の態度は、変革よりも超越に傾いている」

この指摘には、うなずく人も多い

のではないか。たとえば、日本のホスピスの多くがキリスト教精神によつて運営され、仏教系が皆無に近いことは認めざるをえないのだ。

さて、この問いに仏教者はどう答えるのか。本格的な討議をする時間はほとんどなかったが、私は手を挙げてこんな発言を試してみた。

「キリスト教倫理というが、その多くはユダヤ教の聖典である旧約聖書による。新約聖書『ヨハネによる福音書』によれば、イエスはむしろ、

姦通した女を許すなど、世俗倫理を否定した方だった。倫理を貫く側でなく、許す側だった点では、親鸞と同じように思います……」

対立点よりも共通点を探したく思つて述べたのだが、実は論点をずらしただけであり、先の問いにはまったく答えていない。どう応じるかは難しいが、ともかく、仏教徒はこうした批判にも身をさらし、考えていくべきだ、と私は思った。

それには、今回のような国際会議へ積極的に参加することも一つの訓練になるだろう。外国の人々が抱いている仏教への疑問は、日本人の多くも感じているはずだから。

(すがわら・のおお)

東京医療保健大学教授

